講座　「坐禅は礼拝行」　　　　　　　　　　　　　　　　　令和３年１０月３０日（土）

◎道元禅師

１．このは すなわち**のなり**。…

４．**ただ わがをもをも ちれて、のえにげれて**、のかたより おこなわれて、これにがいもてゆくとき、ちらをもいれず、ころをも やさずして、をれ、となる。のか、ころに おるべき。

●『正法眼蔵随聞記』（角川文庫）から

５．**恣いままに我が心に任せて悪事をするは、一向の悪人なり**。（73頁）

６．**心を以て仏法を計較（けきょう）する間は、万劫千生得べからず。心を放下して知見解会（ちけんげえ）を捨る時得るなり**。…**しかあれば心の念慮知見を一向に捨て、只管打坐すれば道は親しみ得なり**。しかあれば道を得ることは、正しく身を以て得るなり。ここに依て坐を専らにすべしと覚えて勧むるなり。

７．学道の人、**身心を放下して一向に仏法に入るべし**。

古人云く、「**百尺竿頭如何進歩**」と。…それを一歩進めよというは、よもあしからじと思い切て、**身命を放下する**ように、度世の業よりはじめて一身の活計に到るまで、思いすつべきなり。それを捨てざらんほどは、いかに頭燃を拂うて学道するようなりとも、道を得ることはかなうべからざるなり。**ただ思い切て身心ともに放下すべきなり**。（130頁）

８．古人の云く、「**百尺の竿頭にさらに一歩をすすむべし**」と。この心は、十丈の竿のさきにのぼりて、**なお手足をはなちてすなわち身心を放下するが如くすべし**。…

**ただ身心を仏法になげすてて、更に悟道得道までをも望む事なく修行するを以て、これを不汚染の行人とはいうなり**。（233頁）

９．学道は須らく**吾我を離るべし**。たとい千経万論を学し得たりとも、我執を離れずんば終に魔坑に落べし。…

**我を離るるというは、我が身心を仏法の大海に抛向して、苦しく愁うるとも仏法に随いて修行するなり**。…**我が身の器量を顧み仏法に契うまじなんど思うも、我執を持ちたる故なり**。人目を顧み人情を憚かるは、即ち我執の本なり。ただ仏法を学すべし。世情に随うことなかれ。（211頁）

１０．**まずただ欣求の志の切なるべきなり**。**譬えば重き宝をぬすまんと思い、強き敵をうたんと思い、高き色にあわんと思う心あらん人は、行住坐臥ことにふれ、おりに随って、種々の事かわり来るとも、それに随いて隙（すきま）を求め心に懸くるなり。この心あながちに切なるもの、とげずと云うことなきなり**。（103頁）

◎広島大学法科大学院長のコラム「敬虔と跪拝」から

11.　昔、耳にタコができるくらい聞かされた言葉です。

12. 「教えることが学ぶ者の潜在的能力を引き出すことにあるとすれば、学ぶ者の前では**教える者は自身の 配慮をすべて捨てよ**。**自分がああだこうだとか言うことは意識的にも無意識的にも出してはならない**。

13.　さもなくば、教壇は教える者の興行の舞台にすぎず、いくら双方向的な手法が取られても、**一方的な押し付けにしかならない**。

14.　**自分が自分がという者には他人は見えていない**。

15.　**ただただ学ぶ者を見てその者が自立的に学ぶことができるようその能力を育てることを意識せよ**。そのための方法論を学べ、自らはそれを実 践してその成果を確認せよ。それを伝えるのだ。そこから教える者の自己改革が始まり、教育の場が活力と創造に満ちる。」、と。

16.　その当時は、**敬虔さと跪拝**なのかと思いました。その言葉の主が教壇にあがるとき、登壇の前に立ち止まって目を閉じるのですが、それは**気を集中させているのかなと見ていたのですが、そうではなく**、彼は**自分の計らいを捨て、学ぶ者の潜在的能力に跪き敬っていた**のだと知った時には、とても恥ずかしい思いをしました。

17.　後に仏法を少しかじって「捨」の行と「積徳」の行とを学んだ時に、彼のその姿勢とこの言葉を一番に思い出しました。**教壇に立つというのは我を捨てる行なのだと得心した**ものです。

◎「寒山詩の一句」（清水文雄［1903-1998］三島由紀夫の師）

18. **源窮水不窮 (源窮まりて、水窮まらず)**―― この一句が寒山詩集にあることを教えてくれたのは、唐木順三さんである。それは、昨年九月わたくしが本校の校長に就任するすこし前のことであった。…

19.　唐木さんは、「**人智人力で窮め尽くし得ないものに対する畏敬の念を現代人は失はうとしてゐるのではなからうか**」という文明批評的観点から、「おそれ」という感情について書いたエッセイのなかに、右の詩句を引用しているのである。…

20. **水源は探究され、解明されたが、水は相変わらずこんこんとわき出てつきない。そこには人智人力を超えた不可思議な世界がある。そういうものへの畏敬の念を失ったところに、現代の不幸は根ざすのであろう。**

21.　**わたくしは登校すると、墨痕**（ぼっこん）**あざやかなこの詩句の前にたたずみ、心の姿勢を正して、朝礼台に立つのが常である。**　(昭和四十年四月)

◎唐木順三「おそれといふ感情　―ある泉のほとりで思ったこと―」

22.　**水源は探究され、解明されたが 水は相変らず滾々とわき出ているというのであろう。人跡未踏の昔からと同様に、水は湧き出ている。人に知られようが知られまいが、我関せずと日夜に湧き出て窮るところがないというのである。…**

**23. 近代という時代は、ここにいう「おそれ」をなくそうとする方向にすすんできた。…十七世紀のデカルト以来、人間理性の力を信じ、理性を正しく行使するならば、世に不可解なことはなにひとつないと信じ、人智人力の無限の能力を信ずるという方向を辿って今日に到った。…**

**24. 人智人力以上のもの、形而上的なもの、神聖なものを、人智の未発達時代の遺物とするか、無用の長物とするか、または無視するか、そういう方向に進んできている。つまりは、おそれという感情を不用のもの、無用のものとしてきたのである。**それがヨーロッパの近代の特色であるが、ヨーロッパはその科学技術的先進性のために、世界の優位に立ち、ヨーロッパの近代が即ち世界の近代ということになった。…

25. **「おそれ」も「はづかし」も、自己を超えた存在との関係から起る感情である。そして自己を超え、人智人力を超えたものを無用にし、拒否することによって成立した近代が、そういう高度の感情を失っていくことも、当然といえば当然だが、この当然は正当とはいいがたい。**